

「チャコと不思議な本棚」

作・演出 春田鮎



登場人物

チャコ・・・本が大好きな空想癖の女の子
ママ・・・チャコの母親 会社を経営
パパ・・・チャコのパパ 所在不明
端名先生・・・精神科医 はてな？が口癖
クリス神父・・・悪魔祓いに来た神父
パンドラ・・・天使か悪魔か？「怪僧ラスプーチンの弟子」の主人公
タロット・・・「101回死んだ猫」の主人公の猫
にんじん・・・赤毛の少年 ジュール・ルナールの小説「にんじん」の主人公
マリーアントワネット・・・フランス王妃 「バスチーユ陥落」に登場
海賊バンジー・・・海賊船ホエール号の船長
お玉・・・江戸時代のゴースト 「箱根関所物語」に登場する少女
ラズウェル大佐・・・おもちゃの兵隊
エリザベート・・・稀代の悪女 本から抜けだし世界を支配しようと企む
もくじ・・・本の神様
蜘蛛・・・チエコの部屋に住みついたイエユウレイグモ 物語のナビゲーター
白雪姫・・・エリザベートの取り巻き
シンデレラ・・・エリザベートの取り巻き
森の小人A・・・エリザベートの召使
森の小人B・・・エリザベートの召使
森の小人C・・・エリザベートの召使
ユダ・・・キリストを裏切った使徒

「チャコと不思議な本棚」

●第1章

蜘蛛「私はこの部屋に住むイエユウレイグモ。ここに引越してきて早半年。いつも薄暗くて、埃っぽくて、とても住みやすい部屋だ。半年で分かったことは以下の通り。この部屋の主の名前は本城千弥子。いつもはチャコと呼ばれてる。とはいっても、彼女をそう呼ぶのはチャコのみで、ママだけだけれど。どうしてかって？だって彼女は本ばかり読んでいて、友達なんて一人もいやしない。今どきに言えば引きこもり、それに下近眼のメガネ女子。オシャレなドレスも、化粧道具のひとつも持っていない。あるのは大量の本だけ。本城って名前の通り、部屋の中は本であふれていて、さしもの本の城壁に囲まれた城のようだ。これまでママ以外は誰ひとりこの城の中に入ることは出来なかった。この日始まった、不思議で奇妙な出来事が起こるまでは」

部屋で本を読むチャコ。本だらけの部屋。色んな本をとつかえひっかえ読んでいる。たまにビスケットをかじったり、本以外で唯一の趣味、包装紙をコレクションしたり。

チャコ「あ、そうだわ、久々に記録に挑戦しなければ」

蜘蛛「はじまった、はじまった。そんなことするくらいなら、外に出て散歩でもしたらいいのに」

ストップウォッチとある本を用意するチャコ。

チャコ「ストップウォッチ良し。人間失格、良し。今日こそ新記録を出すのです」

蜘蛛「チャコが何を始めたかって？太宰治の人間失格の速読記録。この長くも短くもない私小説をどのくらいで読み切れるか計って、新記録を目指してるんだって。たったの一人でね！」

チャコ「前は82分でした。今日こそは80分を切りたいのです。けど決して読み飛ばしたり、目だけで追って頭に入っていないなんていうのはルール違反！本当に一字一文字しっかりと読んだ記録にこそ意味があるのです。そうでなければ本に失礼なので、さして、それでは始めるとしましょう！本城千弥子、全力で人間失格、読みますわ！いざ！」

蜘蛛「あんたこそ、人間失格・・・」

ママ「チャコー！ご飯よ！」

チャコ「かー！もう！いらねえよ、ばばあ！あっち行ってろ！」

ママ「だめよ！あなた、お昼ごはんも食べてないじゃない！どうせまたビスケットばかり食べてるんでしょ！ほら、ちよつとここを開けなさい！開けなさいっつらー！」

チャコ「入るんじゃないやねえよ！このやろう！やめろったら、やめろ！」
ママ「ママをなめるんじゃないわよお！！おりゃー！」

蜘蛛「ママの勝ちー！」

無理やり部屋に侵入してきたママ。

ママ「ふーふー・・・まったく、相変わらずきつたない部屋ね」

チャコ「・・・ママこそ、相変わらずド派手な化粧しやがって・・・恥ずかしくないわけ！？
娘の身にもなれよ！？」

ママ「一歩も外に出ないくせに何生意気言ってるのよ！？こっちこそ、恥ずかしいわよ！
いい年して引きこもりで二重人格の娘なんて」

チャコ「二重人格って何よ！？私のどこが！？」

ママ「あなた、気付いてないの！？あなたはね、私と話す時以外は別人みたいなのよ？
いっただって一人で妙な丁寧語でぶつぶと・・・まったく、どうしてこんな風になっちゃっ
たのかしら・・・そう！本よ・・・本ばかり読んでるからこんなことになっちゃったの
よ！こんなもの、こうしてやる！」

床に本を投げつけるママ。

チャコ「やめろよ、ばばあ！」

ママ「やめないわ！私が何したって言うのよ！一生懸命働いて、一人であなたを育ててき
たっていうのに！これがその結果！？ひどい！ひどいわよ！本ばかり読んで・・・まる
で当てつけみたいに・・・あなた、パパが私たちにしたことさ」

チャコ「パパの話はやめろ！・・・やめろ・・・もう、出てけよ・・・出てけってば！」
ママ「チャコ！・・・」

泣きながら部屋を出ていくママ。

蜘蛛「ママは会社の社長さん。エステサロンやブティックなんかをいくつも経営するやり
手だ。パパと離婚してもお金は困らないみたいだね。パパは今どこでどうしてるのか分か
らないらしい。チャコの本好きはパパに似たんだとママが言ってた」

チャコ「・・・いけない。記録測定の途中なのでした。さ、気を取り直して、新記録を」

突然、部屋が揺れ出す。

チャコ「わ！地震！？・・・どうしましょう！大きい！・・・きえー！」
蜘蛛「これはデカイ。つぶされないようにしなくちゃ。蜘蛛の巣は・・・あきらめるか。またつくろう。命あつての物種」

更に強く揺れる部屋。

チャコ・蜘蛛「う、う、・・・うわあー！！」

暗転

崩れ落ちた本が散乱している部屋。

チャコ「おさまったようですね？・・・フー、一時はどうなるかと思いました」

タロット「いててて」

チャコ「まあ、猫」

タロット「ふー。君、ケガない？」

チャコ「ないわ」

タロット「そう、よかった」

チャコ「・・・え？」

タロット「・・・ん？」

チャコ「キヤー！！」

タロット「どうしたの！？やっぱりどこかぶつけた？肘？肘ってビーンってなるよね？しびれたみたいになさ」

チャコ「違う違う、飼ってない！」

タロット「かってない？何を？」

チャコ「猫！」

タロット「猫？そう・・・あ、僕の事？やだなあ、僕は飼い猫なんかじゃないよ、僕はほら、その本の」

チャコ「そういう事ではなくて！・・・あらー？あらあらー？なんだかどこかで見たような・・・あなた、もしかしてタロット！？101回死んだ猫のタロット！？」

タロット「イエス。うまく出てこらえたなあ。ラッキー、ラッキー」

チャコ「嘘みたい。でも、尻尾も、ヒゲも、本物みたいですね」

タロット「デリケートな部分に触らないでよ。失礼しちゃうな」

チャコ「ごめんあそばせ！・・・だけど、いったいどちらからおいでに？」

タロット「本の中からさ」

チャコ「本の中！？」

タロット「うん」

チャコ「ああ、なるほど」

タロット「何がなるほど？」

チャコ「夢ですね、これは。大きな地震が来て、きっと私は打ち所が悪くて今、気絶しているんでしょう。そうして、本の登場人物が本から出てきた夢を見てると、うんうん」

タロット「夢じゃないよ」

チャコ「夢じゃない・・・え！？夢じゃないって!？」

タロット「それに地震なんかじゃないよ。揺れたのはこの部屋だけさ」

チャコ「どういう事なのですか!？」

タロット「本の世界の扉を爆破してこじ開けたのさ。その衝撃で揺れたんだ。扉の鍵を持つてるのはエリザベートだからね」

チャコ「本の世界の扉？エリザベートって誰？」

タロット「ま、それはおいおい」

チャコ「だけど、その扉をこじ開けて、いったい何をしに来たの？」

タロット「ちよつと困ったことがあってね」

ママ「チャコ！何か大きな音がしたけど、大丈夫!？」

チャコ「大丈夫だよ、いちいちうっせーな！来るなっていつてるだろ!？」

タロット「やばい！君以外の人に見られるとまずいんだ！一旦帰るね」

チャコ「え？また来るの？」

タロット「もちろん。じゃね」

消えるタロット。

部屋に入ってくるママ。

ママ「ほっておけないから言ってるのよ！なあに？これ、本がこんなに散らかって」

チャコ「なんなのですか？いったい・・・」

ママ「どうしたの？ぼーとして。本で頭でも打ったの？」

チャコ「ママ・・・本の中から猫が出てきた」

ママ「やっぱり打ち所が悪かったのね!」

ぼーとするチャコを見かねて本をかたづけけるママ。

蜘蛛「なんだ、あの猫は？あんなのが住み着いたらおちおち昼寝も出来ない。あいつらは遊び半分で虫を殺すから叶わない。まあ、遊び半分で命を粗末にするのは、人間も同じか」

●第2章

部屋に往診に来た精神科医の端名先生。

ママ「どうなんですか？端名先生。なんだか父親が失踪してからというものの、この子は日に日におかしくなっていくようで。心配で夜もおちおち寝ていられません」

端名「はてなあ？特別変わったところもないようだが。視線も定まっているし、受け答えに淀みもない。言葉づかいも丁寧だしな。まあ、丁寧すぎるくらいはあるが」

ママ「嘘です！丁寧なのは私意外の人間と話すときだけなんです！私と二人で話すときの、そりゃあ汚い言葉づかいだったら」

端名「まあまあ、お母さん。たしかに、本から猫が飛び出てきた話はあまりに突飛で、お母さんが驚くのも無理はないが、この年の女の子は夢見がちなものだ。ときどき、夢と現実を混同することはよくあることで」

チャコ「嘘ではございません！本当に本から猫が出てきて、私と会話をしたのです。そして、また来ると言って、消えてしまいました・・・」

端名「はてなあ？ま、少し様子を見ましょう。薬を出しておきますから。それでは私はこれで」

ママ「ありがとうございます」

帰っていく端名先生。見送りに出ていくママ。

チャコ「精神科医なんか呼びやがって、くそばばあ・・・はあ、私、本当に頭がおかしくなってしまったのでしょうか・・・」

メガネをはずし、机に顔を伏せるチャコ。すると、本が1冊、コトツと本棚から落ちる。

いつの間にか部屋の中にいるパンドラ。

パンドラ「タロットが言っていた通りの本だらけ、いや、本しかない部屋だな」

チャコ「わ！出た！猫！？」

パンドラ「俺は猫じゃないよ。よく見てみる」

チャコ「メガネ、メガネ・・・は、猫じゃない・・・今度はなに？むむむ、なんという、禍々しさ（まがまがしさ）！」

パンドラ「言い方！禍々しいなんて言葉、君ぐらいの子は普通使わないぜ。そうだな、妖しげでカッコいいとか言ってくれないかな？」

チャコ「失礼いたしました。でも・・・あなた、猫の仲間？あ、飼い主とか？」

パンドラ「ノー、あいつはタロット。君も知ってるだろう？101回も死んだ猫のタロットだ。あ、そもそも君の本だからな、知ってるに決まってるか」

チャコ「だけど私の存じているタロットは、あくまでも本の中の空想の生き物であって、猫なのに話すことが出来るけれど、つまりそれは作者が考えて書いたセリフといった」

パンドラ「ぶつぶー！はい、君もただの普通の本好きに決定！」

チャコ「遺憾！遺憾でございます！私は、そんなじょそこの本好きとはわけが違います！」

パンドラ「それじゃあどうして本の中の登場人物が作りものだって決めつけちゃうのさ。考えてもみたまえ。たった一人の人間が、何人もの人物の心を理解したり、言葉を発したりできると思うかい？」

チャコ「え？・・・でもそれが、作家ってものでしょ？」

パンドラ「違うよ。作家ていうのはね、ただのシャーマンさ」

チャコ「シャーマン？」

パンドラ「ああ。たくさんの文字を書くことが得意な霊媒師、イタコ、口寄せってところかな。彼らは俺たちの気持ち、行動、言葉を俺たちが変わって書き写しているに過ぎない。言い換えれば、彼らの創作活動は、我々に操られているようなものさ」

チャコ「だけど、それが何故、私がただの本好きってことになるのですか！？」

パンドラ「本当の本好きは、本の中の出来事や人物を作りものだとは思わない」

チャコ「そんな馬鹿な・・・それこそ、頭がおかしいんじゃないですか！・・・ていうか、この状況自体が頭おかしいのよ・・・誰なの？この男は・・・」

パンドラ「私はパンドラ。出身はロシア。“怪僧ラスプーチンの弟子” 読んだよね？去年の夏に」

チャコ「あ・・・読みましたわ。くっそ暑い中、ロシアの話なら少しは涼しくなるかと思っ。そう、あなたが。想像していたより、素敵ですわよ」

パンドラ「あ、褒めた。だいぶ信じられるようになってきたんじゃないか。俺が実在しているわけがありません」

チャコ「それは目の前にいるからですわ。普通は信じたりできるものですか。そんな人、

いるわけがありません」

パンドラ「いるよ」

チャコ「どこに？いったいどこの誰だというのです？」

パンドラ「あんたのパパさ」

チャコ「パパ？」

また本棚から本が落下する。

するといつの間にか、にんじんが立っている。

パンドラ「やあ、にんじん。君も来たか」

チャコ「また、増えた・・・」

にんじん「あんたとタロットが扉を爆破して、こっちに来られるって噂を聞いたからさ。急いで来てみたけど、切つたない部屋だねえ、まるでフェリックス兄さんの部屋みたいだ」

チャコ「フェリックス兄さんって？もしかして」

にんじん「ああ、僕の兄さん。意地悪で面倒くさがりの最低なやつさ。あ、失礼、僕はフランソワ・ルピック。ルピック家のやっかいものさ。みんな僕をにんじて呼ぶんだ。こんな色の髪をしてるからね」

チャコ「まあ！あなたがにんじん！お会いできてうれしいわ！」

握手を求めるチャコ。

にんじん「あ、ありがとう、ずいぶん気に入られてるなあ」

パンドラ「俺の時の反応とずいぶん違うじゃないか」

チャコ「だって私、にんじんさんにはすごく勇気づけられたんですもの！どんなに家族にひどい仕打ちを受けても自分を失わず、しっかり生きていく姿にいつも“自分に似てるな”“死んだりしちゃいけない”なんて共感しながら読んでいたんですから！」

にんじん「いや、それ、全然違うよ。家族なんか大っ嫌いだし、自分なんて失いまくってるもん。ただ、この本の作者のジュール・ルナールってやつが極力感情を押し殺して客観的に書いただけでさ、本当は感情はメチャクチャ、気分は最悪、毎日死にたかったっていうのが真相」

チャコ「そんな・・・ショックでございますわ」

にんじん「だってさ、物語のラスト、あれだけ僕をいじめてきたママがさ、どうして急に僕への愛情に目覚めちゃうわけ？意味わかんない。しかも最後の最後にパパが僕に言った言葉覚えてる？“お前にも、いつかわかるさ”って！おい、なんのことだ、そりゃ！？って思わなかった？」

チャコ「たしかに・・・思いました！そうなんです、今だから言っちゃいますけど、にんじんっていうこの小説、いったい何が言いたかったのか、実はさっぱりわかりません！だってそうでしょ？母と兄と姉にしこたま苛められて暮らす少年にんじんを、仕事が忙しくてたまーに帰ってくる父親が、なぜか家族に隠れてにんじんを慰めるんです。だったらいつそ家族会議かなんか開いて“にんじんをいじめるのはやめなさい！”とか言えばいいのにそれはしない。だから私、にんじんは父親が浮気して愛人に産ませた子供なんじゃないかと考えていたんです。けどどうやら母親の実の子のようで・・・。まったく、何なんだ？この小説は！？」

本を床にたたきつけるチャコ。息が上がっている。

パンドラ「おいおい！」

にんじん「いやあ・・・なんだか申し訳ない。変な家族で」

チャコ「そうなんです・・・家族って変なんです。そんな家族の変な姿をそのまま書いてるから、たぶん、私・・・共感したんだと思います」

パンドラ「君も相当変だけど・・・」

にんじん「家族は変か・・・」

パンドラ「その変な家族の、変な君の父親が、更に変なことになってるんだ」

チャコ「パパが？・・・関係ありません、あんな人、今さら」

にんじん「気持ちは分かるけど、君に頼るしか方法が無いんだよ」

チャコ「え？」

どさどさっと、本が数冊落下する。

いつの間にか部屋に現れたマリーアントワネット、ラズウェル大佐、海賊バンジー。

マリーアントワネット（以下マリー）「いやん！この部屋ほこりっばい！のどがイガイガするわ。誰かワインを持ってきて！」

ラズウェル大佐（以下ラズウェル）「マリーアントワネット王妃、それは無理です。そういつたあなたの見境ないわがままがフランス革命を誘発したのだと、まだお気づきになりませんか！？」

マリー「なによ、あなた、オモチャの兵隊の分際で！溶鉱炉に落として溶かしちゃうわよ？」
ラズウェル「なんという事を！今はこんな姿をしています、私はイギリス王朝、陸軍近衛師団ラズウェル大佐ですぞ！魔法の魔法でブリキの人形にされているが、いつの日か必ずや魔法を駆逐して！」

バンジー「うるせえジジイだな、少し黙ってな。お嬢さん、このバンジー様が悪い様にはしねえから、どうだ？ちよつくら顔貸してくれないか？」

チャコ「きゃあ！あなた、海賊バンジー！？私、大大ファンなんです！あ、サインいただけます？えっと、あった、この本に、お願いします！」

バンジー「お、海賊バンジーと6人の愚か者”か。お安い御用、ここでいい？」

チャコ「はい！」

パンドラ「だいぶこの状況に慣れてきたようだね」

バンジー「それで、来てくれるの？」

チャコ「どちらへですか？」

バンジー「本の世界さ。決まってるだろ？」

チャコ「本の世界へ行けるのですか！？行きます、行きます！」

にんじん「喜んでるけど、何が起きてるか知ってる？」

チャコ「知りません」

ラズウェル「戦争だ！今、本の世界は戦場と化している！」

マリー「戦争は民衆をだますにはうってつけだけど、夜も砲弾の音がして眠るのに邪魔なのよね。音のしない大砲とか作ってくれないかしら？」

ラズウェル「なんという不謹慎な！？あなたは兵士と市民の命をどうお考えなのですか！？」

マリー「消耗品。いけない？」

ラズウェル「ムギー！！いかに王妃といえども捨て置けぬ発言！この場で革命を断行して

くれる！そこにおなおりあれ！」

バンジー「うるせえって言ってんだろう、静かにしろ！だがなお嬢さん、本の世界が戦争状態だつていうのは本当だ。しかも、かなりやばい」

チャコ「良くわかりませんわ・・・やばいっていったい」

その時突然、部屋が大きく揺れる。

血だらけで刀を振り回すお玉が現れる。

お玉「ぎはははは！殺してやる！みーんな殺してやるー！ぎはははは！」

パンドラ「まずい！ついにお玉まで書きかえられちまったか！」

チャコ「お玉？」

にんじん「ああ、箱根の関所やぶりでつかまって処刑されたお玉。読んだらう？“箱根関所・お玉ヶ池”」

チャコ「ああ！出女の！悲しいお話ですよね・・・でもそのお玉さんがどうして？」

ラズウェル「本当は物静かで優しい女性なんだが」

マリー「エリザベートが彼女のお話を書き換えたのよ。あなたの父親を使ってね」

チャコ「パパが？」

バンジー「説明は後だ！とりあえずこいつをなんとかしねえとな」

剣を抜いてお玉に立ち向かうバンジー。

バンジー「お玉、悪く思うなよ。今度こそ本当に成仏しやがれ！」

お玉「ぬがー！！！」

お玉とバンジーの戦い。

バンジー「くそ！手ごわい野郎だ！」

お玉「皆殺しだー！あたしを処刑したやつらと共に、全員道連れにしてやる！」

エリザベートが現れる。

エリザベート「あはははは！海賊バンジーともあろう者が、だいぶお困りようね？」

バンジー「出やがったな、エリザベート！」

パンドラ「エリザベート、もうよそうぜ。こんなこといくら続けても、お前の恨みは晴れやしないんじゃないか？」

エリザベート「恨み？（苦笑）そんなことのために私が本を書き換えているとでも？」

バンジー「違うのかよ？」

エリザベート「ははははは！笑止な事を。私はね、本の世界を飛び出して私の王国を作りたいの。本の世界に閉じ込められている魂とパワーを全て開放して、空想と現実の垣根を取り払い、全てを私の前にひざまずかせる。そのためには手段は選ばないわ」

チャコの父親が現れる。

チャコ「パパ！」

エリザベート「お前がこの男の娘ね。パンドラ、ありがとう。おかげで探す手間が省けたわ」

パンドラ「チッ！」

にんじん「おじさん！目を覚ませよ！その手に持つてる『神の校正ペン』をこっちへ！さ！」

うつろな顔のチャコの父親。

パパ「……………」

エリザベート「無駄よ。この男はもう私の声しか聞こえない。ね？そうでしょ？」

パパ「はい。エリザベート編集長」

チャコ「編集長？」

エリザベート「そう。今、彼にとつての一番大事な存在は編集長様。ほかは必要ない。だって彼に執筆をさせてくれるのは編集長様だけだもの。彼はただただずっと書いていたいのよ。書いていられれば幸せなの」

パパ「書きたいんだ。パパは小説家になりたくて、どうしても小説を続けたくて、だけどお金にならないからって、ママにやめさせられた。だからパパは……家を出て行くしかなかったんだ……」

エリザベート「ふふふ、そうね。でもね本当は、彼は書きたくても書けなくなっちゃったのよ」

チャコ「書けなくなった？」

エリザベート「ええ。彼にはね……才能がなかったのよ！」

バンジー「きつちーなー」

エリザベート「書きたくても書けなくなった彼はある時、本の世界に迷い込んだ」

ラズウェル「貴様が誘い込んだのだろう！」

エリザベート「その通り。私は私の思った通りに本を書き換えてくれる作家を探していた。唯一私が持っている、本の世界の扉の鍵を開けてね。書く目標を失っていた彼は素晴らし編集者である私に従がって本を直し始めた。すべてが終わった暁には、今までに見たこともない、誰も思いつかなかった斬新なアラスジを与えることを条件にね。この“神の校正ペン”も本の世界に代々受け継がれてきたもの。しかしこのペンは誰もが使う事が出来るわけではないの」

チャコ「どういうことだよ？」

エリザベート「このペンは、本の中の世界が本当に存在すると心から信じている人間だけが使う事が出来る」

チャコ「心から信じている人間・・・それがパパだと？」

エリザベート「そんな人間を見つけるまでどれだけ待ったことか。しかし」

チャコ「なんだよ？」

エリザベート「この男が心に引っかかっている障害がひとつだけある。その障害を取り除けばこの男は永遠に私の僕だ」

チャコ「なんなんだよ？その障害ってのは！？」

エリザベート「お前だ！本城千弥子。お前の存在が消えれば、この男が気に掛けるものは何もなくなり、作家として完全な自由を手に入れる。本物の作家になる為には、何物にもとらわれることなく、真に自由でなければならぬのよ！」

チャコ「嘘だ！パパが私を気にかけてるわけない！だってパパは私を捨てて出て行ったんだ！だから、そんなの嘘だ！！」

エリザベート「おやり」

チャコめがけて突進し、刀を振り下すお玉。

お玉「きよえー！！！！」

バンジー「しまった！」

お玉に切られて血をふきだすチャコ。

暗転

●第3章

チャコの部屋。悪魔祓いに来たクリス神父。祈りの声。

眠っている様子のチャコを心配そうに見つめるママ。

蜘蛛「いやあ、おどろいた。次から次へと、いろんな奴らが本から飛び出てきたかと思ったら、ついには家主が狂った女に切りつけられるんだもの。あれ？でも良く生きてたなあ。ま、無事で良かった良かった。彼女に死なれたんじや、この快適な住処がなくなってしまうからね。だけどチャコを心配したママは、精神科医の次は神父を連れてきたようだけど、どうなることやら」

ママ「どうなんですか？神父様・・・何やら大勢が暴れているような大きな音が続いているんですが、部屋に入ると嫌がるもので、しばらく様子を見ていたんですが、突然、恐ろ

しいような叫び声が聞こえてきたので、あわてて来てみたら、泡を吹いて倒れていたんです。なんとかベッドには運んだんですが、ずっと眠ったままで」

クリス「うーん・・・これは・・・」

ママ「これは？」

クリス「悪魔が憑りついていますね」

ママ「ひえー！悪魔！？」

クリス「おそらく彼女が見たという本から飛び出てきた人物たちは、悪魔による幻影、幻です。つまり彼女の中から悪魔を退散させなければ、解決は難しいでしょう」

ママ「まあ、なんてことなの・・・どうしたら・・・神父様、お願いです！この子をお救い下さい！どうすればこの子は元に戻るんですか！？ねえ、神父様！」

クリス「悪魔祓いをしましょう」

ママ「悪魔祓い？」

クリス「はい。特殊な儀式を施して、悪魔をやっつけるのです。ただ」

ママ「ただ？」

クリス「特殊な儀式なので、多少お値段が張るのですが」

ママ「かまいません！お金ならいくらでもお支払いします！早く、その儀式を始めてください！」

クリス「ちょっと、ちょっと待ってください！落ち着いて」

ママ「あ、すみません」

クリス「いろいろ準備がありますから、まずはお母さん、銀行に行ってここにお金を振り込んでください。そうですね、とりあえずは30万、準備金ということで。その間に準備しておきますから。さ、急ぎましょう。娘さんのために」

ママ「はい！では娘をよろしくお願いします。チャコ、頑張るのよ！」

出ていくママ。

クリス「ふふん、上手くいった。ちよろいもんだな」

タロット「何がちよろいつて？」

クリス「だ、だれだ！？あ、お母さん？なにか忘れ物でも？」

タロット「インチキ神父が、適当な事言って出来もしない悪魔祓いの儀式に30万だと？」

クリス「だれだ！？出てこい！いや、出て来るな・・・おいおい、本当に悪魔でもついでるのか？馬鹿、それでも神父か、空耳だ、空耳」

タロット「空耳じゃないさ。これならどうだい！？」

どさっと本棚から本が落ちてくる。

タロットがもくじを連れて現れる。

クリス「出たー！悪魔よ去れ！消えろ！助けて！ご勘弁を！ごめんなさい！・・・さいならー！」

逃げ帰っていく神父。

タロット「チャコ、起きろよ。チャコ。邪魔者は追い返したぜ」

チャコ「・・・タロットさん？あれ、私どうしたのでしょうか・・・いつの間にベッドに」

タロット「ひどい目にあつたね。畜生、エリザベートのやつ」

チャコ「エリザベート？・・・あ、パパ！パパに会ったんだわ」

タロット「らしいね。パンドラに聞いたよ」

チャコ「お友達なのですか？パンドラさんと」

タロット「友達？ははは、別に友達じゃないよ、あんな気取り屋。だけど、本の世界を守るためには協力しなくちゃね。あいつは頭がいいからさ」

チャコ「この方は？」

タロット「ああ、忘れてた。この子はもくじ。本の神様だ」

チャコ「もくじって、あの本の最初に書いてある、見出しが書いてあるあの目次？」

タロット「まあ、そうだね。彼の中には、世界中のあらゆる全ての本が見出しになって、目次として収まっている。彼に聞けば、どんな本の情報だろうと作者、出版日、国、登場人物、あらすじなんかすぐわかる」

もくじ「ハロー、こんにちは、ニンハオ、グーテンターク、ボンジョルノ、アンニョンハセヨ、サワディーカップ」

タロット「OK OK、もくじ、もういいよ」

チャコ「すごい、何カ国語がわかるのですか？」

もくじ「8000語くらいです。言葉は日夜変化しますからね」

チャコ「言葉って8000もあるのですか？」

もくじ「はい。正確に数えてはいませんが、私は全ての書物を管理するのが務めですから全ての言語を理解しています。古くは紀元前3200年前、世界最古の文書といわれるメソポタミア文明の粘土板に書かれた羊や小麦を売った数を書いた帳簿のようなものから、最新のものでは人工知能、AIが書いた小説“人工知能は眠れない夜、ドットの羊を数えるか”です。AIのペンネームはステイブ・ウイリアム・ホーキング」

チャコ「え！ホーキング博士のフルネームではないですか！？」

もくじ「はい。そのAIのデータベースはホーキング博士だと言われています。だから博士は生きていても言われています」

チャコ「うらやましい」

タロット「うらやましい？ AIがかい？」

チャコ「ええ。だって、食事したり、お風呂に入ったり、人と会ったり話したり、悩んだり、怒ったり・・・そんな煩わしいことから全て解放されて、文字、言葉の世界だけで生きていけるなんて夢のようですよ」

もくじ「同じですよ」

チャコ「同じ？何が同じなのですか？もくじさん」

もくじ「あらゆるもの全て、所詮、実体なんかありません。永遠に不滅のモノなんて存在しないんですよ。だから、チャコさんの生きている世界も、私たちの本の世界も大差はないんです」

チャコ「実体はない・・・」

タロット「なるほどね。それなのにエリザベートは、実体を手にしようとしてるってわけか」

もくじ「そうです。彼女がこれまでに、あなたの父上に命じて書き換えさせた本は数十冊に上ります。お玉の変容もその一部です」

チャコ「私に切りつけてきた・・・」

タロット「本当は大人しくて優しい子なのに」

もくじ「しかしこの世界にはまだ大きな影響は出ていません。それに業を煮やしたエリザベートは恐ろしい計画を実行しようとしている」

タロット「それだけは絶対に止めなきゃならない」

チャコ「どんな計画なのですか？」

もくじ「それは・・・聖書の書き換えです」

チャコ「なんですって！？」

暗転

チャコの部屋で、ママに糾弾されているクリス神父。寝たふりのチャコ。

ママ「神父さん！どうして勝手に帰ったりしたんですか！？お金だって約束通り支払ったっていうのに！きちんとお仕事していただけるまで許しませんからね！いいですか！？」

クリス「はい、すみませんでした・・・」

ママ「お願いしますよ！」

部屋を出ていくママ。

クリス「まいったなあ。まさか教会に怒鳴り込んでくるなんて。しかたない、よくわからないけどやってみるか。だけど悪魔祓いってどうやるんだろうな。そうだ、ググってみよう」

むくつと起き上がるチャコ。

チャコ「神父さま」

クリス「ギャ！出た！助けて！ナンマイダブ、ナンマイダブ、悪霊退散！オーマイガツ！」
チャコ「落ち着いてください。みんなは悪魔の幻影なんかじゃありませんから」

クリス「え？・・・そうなの？じゃあいったい・・・」

チャコ「これから説明してもらいますから、また驚かないでくださいね」

クリス「説明してもらおう？」

チェコが数冊の本を棚から引き出し落とす。

暗転

タロット、パンドラ、にんじん、バンジー、もくじがクリスを囲んでいる。

クリス「・・・ふふふ・・・ふふふ・・・」

タロット「なんでこいつ笑ってんだ？」

パンドラ「気がふれたか？」

にんじん「アーメン」

バンジー「おい、しっかりしろ！そのなまっしろい首を搔っ切るぞ！」

クリス「ひー！・・・嘘だろ？なんかすごいっぱい見えるようになったよ・・・」

チャコ「落ち付いてくださいませ、神父様」

クリス「落ち着けたって一人ならまだしも、こんな完全に普通の人間じゃない、ヒッ！・・・方々に囲まれたんじゃ、この後どうなっちゃうのか気が気じゃないよ」

チャコ「大丈夫ですわよ。本当にこの方たちは、本の中の住人です。決して人間を殺したり、危害を加えたりは致しません」

クリス「本当に？ホントのホント？」

タロット「くだいやつだな」

クリス「ひ！」

もくじ「ホントのホントです。私たちは基本的に、それぞれの本に書かれている行動原理からは逸脱できません。口調や手振り、考え方や話し方も、作者が描いたキャラクターを変えることは出来ないので。ここには人に危害を加える人物は・・・バンジーさんはやや粗暴な面がありますが決してむやみに攻撃を加えたりは・・・しませんか？」

にんじん「さあね？」

クリス「ちよつと、しないって言うてくださいよ、絶対しないって！」

バンジー「んん!？」

クリス「ほら怖い!もつと優しく、可愛い感じで」

バンジー「なに?しょうがねえ、こうか・・・絶対しないもん!何言わせんだ、てめえ!
(切りかかろうとする)」

クリス「イヤー!」

パンドラ「やめろ、バンジー。話が進まない」

バンジー「おっと、わりわりい」

もくじ「ふふふ。聞きましたか?この乱暴者のバンジーさんでさえ嫌がること。それは話が進まないことです。そうじゃないと読者は退屈して読むのをやめて、本を投げ出してしまふ。そうなる、本の登場人物は動けなくなってしまふのです」

パンドラ「さっきもお玉がチャコを切りつけた時、誰かが本を閉じた。書き換えられた“箱根関所物語・お玉ヶ池”をな」

バンジー「あぶなかったぜ、俺としたことが油断してすまなかった」

にんじん「でも血出たよね?」

チャコ「鼻血です」

にんじん「鼻血?」

チャコ「ええ、興奮するとすぐ。子供の頃から鼻の粘膜が脆弱で・・・」

にんじん「かわいそ。でも首トントンしても意味ないらしいよ」

チャコ「そうなんですか!?じゃあ私の幼少からの首トントンは全て無意味だったと」

にんじん「そういう事になるかな」

タロット「いいかい?神父さん。今、本の世界では、本を投げ出されるよりも恐ろしいことが起きようとしているんだ。そして同時に、この人間の世界にも関わる恐ろしいこともね」

クリス「恐ろしい事?」

もくじ「ええ、その事であなただけを迎えに参りました」

クリス「迎え?私は別にどこにも行く気はないけど。これから帰って録り溜めてたクレイジージャーニー見るんだから・・・ちょっと離して、やめてよ、いやだよ!やめ、やめてよ!クレイジー!」

パンドラ「聖書を救うためには、そいつに詳しい人間が必要だってことになってね」

タロット「だから悪いけど一緒に来てね」

クリス「なんで私?」

にんじん「近くにいたから」

クリス「えー!?でも、行くってどこまで?」

バンジー「決まってるだろ?」

一同「本の世界へさ」

本の世界へのトンネルを移動

●第四章

本の世界。ラズウェルとマリーアントワネットが動かない縛られたお玉を見張っている。

蜘蛛「えらいことになってしまったなあ。先が気になって思わず本の世界までついてきてしまった。糸をひよいと猫のしっぽにからませてね。馬鹿な猫だ。ちっとも気付きやしない。しかしいったいあの猫はどこ行ったのかな？あ、誰か来た」

そこにパンドラとチャコとクリスともくじが来る。

パンドラ「お玉はどうだ？」

ラズウェル「切りかかり奇声を上げて倒れてから、微動だにしない」

マリーアントワネット「もう駄目なんじゃなくて？エリザベートなんかには操られたりして、馬鹿な子」

パンドラ「そう言うな、アントワネット。お玉だって好きであんなことをしたんじゃない」
ラズウェル「さようです！次はあなたかもしれませんが、マリーアントワネット王妃。イシシシ」

パンドラ「今、タロットたちがエリザベートの城に偵察に行ってる。俺もこれから行ってくる」

マリー「あら？」

ラズウェル「おお！お玉殿が目覚めたようですぞ」

お玉「うんん・・・」

パンドラ「油断するな」

お玉「あら？わたし・・・みんなどうしたの？」

もくじ「戻ったようですね」

マリー「でもどうしてかしら？」

もくじ「わかりません。でも良かった」

パンドラ「よし。ラズウェル大佐、お玉を頼む」

ラズウェル「了解！」

パンドラ「王妃ともくじはチャコを頼む。行くぞ、神父さん」

クリス「ええ、まったく状況が読めないんですけど」

パンドラ「さっき説明しただろう？聖書が書き換えられそうなんだ。そんなことになったら何が起きるかまったく分からない。世界の歴史がひっくり返るかもしれないんだ。君はそれを止めることが出来る英雄なのかもしれない。または」

クリス「または？」

パンドラ「ただのクソインチキ変態神父かもな」

クリス「それ言いすぎー！ってやつ！」

チャコ「私も参りますわ！」

パンドラ「駄目だ」

チャコ「なぜ！？私が女だからですか？」

パンドラ「切り札だからだ。バカ神父の替えはきいても、君の替えはどこにもいない」

クリス「まったまた言いすぎー！なやつー！」

チャコ「でも、切り札が使いたいときに、そこにいなければ切り札の意味はございません！私は・・・あんな父ですが、やっぱり父なので、そんな父がしてしまった事を、娘の私が何とかしなければならぬと、つまり、その」

ラズウェル「責任を感じておられるんですね。立派！ご立派ですぞ、チャコ殿」

もくじ「おそらく、チャコさんがお玉さんに切り殺されるのを止めたのは、お父様です。本を閉じることが出来るのも人間だけですから。きつと、エリザベートに心を支配されながらも、実の娘を守ったんだと思います。あの時、とっさに自分で書き換えた“箱根関所・お玉ヶ池”を閉じたのでしょうか」

チャコ「パパが・・・」

パンドラ「仕方ない。たしかにチャコの言うことも一理あるな。切り札は使えてこそその切り札か。よし、準備をしる。だが、くれぐれも油断するなよ」

チャコ「はい！」

エリザベートの城に忍び込んだタロットとバンジーとにんじん。

バンジー「ここがエリザベートの城か。さすがにすげえな」

にんじん「感心してる場合？しかしタロットのやつ、ちょっと見て来るって、どこまで行ったんだ？」

タロット「わるいわるい、こいつを探したら迷っちゃった」

にんじん「おい、勝手にうるつくなよ。心配したぞ」

バンジー「なんだよそりゃ？」

タロット「箱根関所・お玉ヶ池」

バンジー「おう、お玉のやつの」

タロット「ああ、とりあえず、書き換えられてたページは爪でひっかいてメチャクチャにしといた。お玉がどうなってるかは分からないけど」

バンジー「さすが猫だな」

タロット「まかせとけ」

にんじん「誰か来た！」

バンジー「いけねえ、隠れる！」

エリザベートが取り巻きのシンデレラと白雪姫、召使の森の小人たちを連れてやってくる。

森の小人たち「ハイホー、ハイホー、ああ殺したい！誰でも彼でもハイホー、ハイホーハイホーハイホー！」

エリザベート「あの男、最後の最後で尻込みするなんて。娘を殺しそこねたわ」

白雪姫「まったくですわ！心中お察し致します」

小人A「ねえねえ、白雪姫！何があつたの？教えて教えて！」

シンデレラ「うるさいわね、チビども！まとわりつくんじゃないわよ！」

小人B「わー、怒った怒った！シンデレラが怒ったぞー！」

シンデレラ「毒りんごでも食わしたろうか！？」

小人C「だけど俺たち3人だけ？」

白雪姫「4人は使えないから、森の沼に沈めてきたのよ」

小人たち「ぎょえー！」

エリザベート「こらこらシンデレラ、それから白雪姫も。いくら人格変わったとはいえ、仮にもあなたたちは女性の憧れ、姫キヤラなんだから、あんまり恐ろしい事ばかり言ってるのは・・・いいわよー！いい、すごくいいわ！これからの時代、女はそうでなくちゃ！いつまでも王子のキスなんかで目を覚ましてる場合じゃないのよ！女の時代、そう、これからは女が世界を牛耳っていくのよ！あーはははは！見てらっしゃい、男世界の錆びついた秩序も慣習も、メチャクチャにしてあげるわ！あーはははははは！」

シンデレラ「素敵よ！エリザベート！」

白雪姫「あなたこそ女王の中の女王！」

シンデレラ&白雪姫「どこまでも」

全員「ついて行きます！」

エリザベート「ほーほほほほ！！！」

去っていくエリザベートたち。

影から出て来るタロット、バンジー、にんじんの3人。

タロット「やべえなあ、あいつら」

バンジー「ショックだわく、俺、白雪姫、ファンだったのに」

にんじん「僕もシンデレラ、タイプだったんだけどなあ・・・」

タロット「そんなこと言ってる場合か！？このままじゃ、ヒロインみんな悪女にされちまうぞ」

バンジー「アリエルも？」

タロット「ああ」

にんじん「クララも？」

タロット「たぶんな」

バンジー&にんじん「ナウシカも！？」

タロット「アニオタか！？・・・ま、そういうことだ。なんか良い手はないかな」

にんじん「だけどパンドラは早まって勝手な行動はするな、偵察だけして戻って来いって」
バンジー「だがよ、別に俺たちはあいつの子分でもなんでもねえからな。なんとなく流れでリーダー面してやがるが、良く考えりや俺がリーダーだっついいわけだろう？」

タロット「なんだと？貧乏海賊の死にぞこないが。お前をリーダーにするくらいならな、そこに突っ立てるちんけな役たたずのにんじん坊やがリーダーの方がまだましつてもんだぜ！」

にんじん「何を！？黙って来いりや勝手なことぬかしやがって。誰が坊やだっつ！？どっちが役立たずか、こいつで決めようじゃねえか！はん！？（ナイフを取り出す）」

バンジー「お前いつの間にそんなもの！？」

にんじん「ふん、いつかあのクソババアをぶっ殺してやろうと思つてさ！さんざん苛め抜かれた恨みを晴らすためにな！」

タロット「おもしれえじゃねえか、生きてママに会えたら好きにしな！」

バンジー「2秒だ！2秒で切り刻んでやる！クワハハハハハ！」

いがみ合う3人。

エリザベートがパパを連れて戻ってくる。

エリザベート「ふふふふ・・・この城で勝手が出来ると思っただかい？愚かものが。まだまだもつと、ひどい人格に書き換えておあげ」

パパ「はい。血に飢えた海賊バンジーは剣を抜きすべてのものを切り裂こうと舌舐めぶりし・・・刃物を隠し持っていたにんじんは目に入る全てを憎みナイフを握りしめ振りまわし・・・102回目の死を前に猫のタロットは道連れを探しとめ・・・殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！！すべて殺し合え！！ははははは！！あははははは！！」

殺し合いを始める3人。

響きわたるエリザベートとパパのあざけり笑う声。

そこに来るパンドラとチャコとクリス。

チャコ「パパ！やめて！」

パパ「・・・・・・・・」

エリザベート「やめるな！書くのをやめるんじゃない！貴様・・・書き続けないか！」

チャコ「パパ！本を閉じて！お願い！」

パパ「チャコ・・・」

本を投げ出して逃げだすパパ。

パンドラ「逃げたぞ！・・・本だ、本を閉じろ！」

クリス「え！？」

パンドラ「早くしろ！本を閉じられるのも人間だけだ！ほら、早く！」

クリス「ひえー！・・・とりゃ！」

本に飛びついて、本を閉じるクリス。

動きを止めて倒れるタロット、バンジー、にんじんの3人。

エリザベート「くそっ！」

去るエリザベート。

チャコ「大丈夫ですか！？タロットさん、バンジーさん、にんじんさん！」

ページを引きちぎるパンドラ。我に戻る3人。

パンドラ「こりゃ、いよいよだな」

暗転

●第五章

【ん】の丘に逃げてきた。パパ。

追いかけてきたエリザベートたち。

エリザベート「お待ち！今さら逃げたってもう手遅れよ。ここは【ん】の丘。言葉の行き止まり。これ以上先はどこへも行けないわ。ちようどよかった。ここで待ち合わせをしているのよ」

白雪姫「待ち合わせ？」

シンデレラ「誰と？」

エリザベート「ふふふ、それは来てからのお楽しみ」

パパ「娘だけには・・・娘だけには、いいパパでいたかった・・・」

エリザベート「手遅れだって言ったでしょ？すでに娘は、お前の本心を知ってしまった。本を書くために自分を捨てた、身勝手な親の本心をね」

白雪姫「ほほほ！娘はとくに愛想尽かしてるわよ。あんたみたいな父親」

シンデレラ「男親っていうのは本当馬鹿よね。夢追ってる姿を尊敬してもらえとか思ってたんでしょ？女は生まれた時からオンナなのよ！」

小人たち「ハイホー、ハイホー、女はみんな、ぜったい許さないビンボー、ビンボ、ビンボ、ビンボー！」

エリザベート「だけど、その娘が、お前の執筆活動の最大の障害だったのはお前も理解したはずよ？だから私はその障害を取り除いてあげようとしているのに」

パパ「しかし・・・やっぱり、私には」

エリザベート「編集長の言うことがきけないというの！？」

パパ「は！・・・わかりました、編集長・・・」

シンデレラ「エリザベート、いつそのことご自分の手で娘を葬ってしまったら？」

白雪姫「そうよね？そうすれば、聖書の書き換えもすんなりと」

エリザベート「じゃあ、あなたたちがやってくれる？あなたたちの本を書き換えていいのなら、こちらからお願いしたいくらいだわ。だけど、そうすればあなたたちの仕業は本に刻まれて、恐ろしい狂気の姫として未来に読み継がれていくことになるのよ。それでもよくって？」

白雪姫「それはちよつと・・・いやね」

シンデレラ「キャラ変もこのぐらいなら、まあ楽しいけど・・・ほほほほ」

エリザベート「それじゃ、いよいよ例の仕事に取り掛かりましょう」

ゆつくり現れる黒装束のユダ。

エリザベート「ユダ。約束通り、持って来てくれた？」

ユダ「ああ」

シンデレラ「待ち合わせの人？」

エリザベート「そう」

白雪姫「それは？」

エリザベート「ふふふ」

ユダ「聖書の原書だ」

白雪姫「ええ！？聖書の原書！」

シンデレラ「・・・なんだか怖いわ」

ユダ「当たりまえだ。これは全ての始まりで・・・終わりだ」

小人たち「ハイホー、ハイホー、それはちよつと、あまりにタブーじゃないの？ないの？ないの？ないの！？」

エリザベート「タブー？何を言ってるの？聖書だろうと書物に違いはないわ。さあ、始めるのよ。世界が私にひれ伏すように、聖書を書き換えなさい！そうだわ、黙示録に出て来る救世主をエリザベートにしまいなさい。そうすれば私は世界を救うメシアになるんだわ！」

パパ「本当に・・・これを書き換えたら本当に最高のあらすじを与えてくれるのですか、編集長！？」

エリザベート「もちろんよ、楽しみにしてなさい。さあ、神の校正ペンを持って。これが終われば心行くまで小説が書けるのよ！あふれるアイデア、きらめく文章、あなたは天才になるのよ！カフカもゲーテも目じゃないわ！あなたは死ぬまで書き続けることが出来るのよ！あはははは」

ユダ「約束通り、私は裏切りものではないと書き加えてくれるんだろうな？」

エリザベート「もちろんよ。わかってるわ」

追いかけてきたチャコ、パンドラ、クリス、バンジー、タロット、にんじん。

チャコ「パパ！やめて！」

クリス「やだなあ、もう、帰りたいなあ」

パパ「チャコ・・・来るな！パパはもうパパじゃない！お前の知ってるパパは・・・死んだんだ！だから頼む・・・帰ってくれ！」

クリス「ね、パパもああ言ってるわけだから、帰りましょう！ね？」

チャコ「このまま帰れるわけねえだろう！？」

クリス「すいません！突如のキヤラ変」

パンドラ「神父さん、どうなんだ！？聖書はまだ無事か？」

自分の聖書を確認するクリス。

クリス「え？あ・・・はい！大丈夫、無事です！まだどこも修正されてはいません」

パンドラ「よかった！急げ、もくじ、まだ何か手があるはずだ」

バンジー「ようし時間を稼ぐか！エリザベート、ここからは俺が相手だ！覚悟しろよ！」

エリザベート「ふん」

1冊の本を一心不乱に書き換えはじめるパパ。

パパ「海賊バンジーの体からは力が抜けてゆき、崩れるように倒れ込んだ！」

バンジー「あれ？なんだか体が・・・ちくしょう、なにしゃがった・・・」

倒れるバンジー。

チャコ「バンジーさん！」

タロット「やられた！早くあのページをひっかいまわないと」

パパ「101回死んだ猫のタロットはすっかり縁側の日向ぼっこをする猫になって、毛づくろいを始めた！」

タロット「あらら、ふあー、眠くなってきちやった・・・ちよつと失礼して、おやすみ・・・」
チャコ「タロットさんまで」

パパ「にんじん少年は泣きながら、にんじんの皮むきをはじめのだった・・・」
にんじん「(しくしく) もう何もかも嫌だ。家には帰りたくない・・・」

チャコ「にんじんさん、しつかり!・・・すつかりいじける」

パパ「ラスプーチンの弟子のパンドラは、それまでの格好良さが嘘のように、3年B組金八先生のモノマネをした後、失神した!」

パンドラ「贈るく言葉♪・・・チャコ、切り札は・・・実話(ガクツ)」

チャコ「何?何て言ったの?モノマネが微妙で良く聞こえなかったわ!パンドラさん!」

エリザベート「パパさん、ご苦労様。咄嗟の執筆で才能のなさがあふれ出てたけどまあいいわ。わかったでしょ?パパはあなたの事より、小説を選んだのよ。だからもう邪魔しないであげて。聖書の原書も間に合ったし、ついに私は世界を手に入れる!本の世界だけではない、全てのものが私にひざまずくのよ!あーはははは」

白雪姫「ビバ!エリザベート!」

シンデレラ「あなたこそ究極の姫キャラよー!」

小人たち「ハイホー!」

パパ「駄目だ・・・書き換えられない」

エリザベート「なんですって!?ちよつと、もう一度やってみなさい!」

パパ「何度やっても駄目です!書き換えても、すぐに元に戻ってしまう・・・どうしてだ!?なぜなんだ!?!」

25

そこに、もくじが駆けつける。ラズウェル、マリーアントワネット、お玉も来る。

チャコ「もくじさん!みんなも!」

ラズウェル「良かった、間に合ったようすな」

クリス「どうしたんだ?なにかわかったのか?」

もくじ「はい!もう大丈夫です!聖書は書き換えられません!書き換えることは出来ないんです!」

エリザベート「なに!?!」

もくじ「モノリスに書かれてた一文を見つけたのです!」

クリス「モノリスって、あの2001年宇宙の旅に出てきた、謎のメッセージがかかれたクソデカイ柱みたいな石板のこと?」

もくじ「ええ。そこに書かれています。神の校正ペンをもってしても書き換えることが出来ないものが」

チャコ「それっていったい?」

もくじ「実話です。本当にあったことは、書き換えることは出来ないのです!書き換えることが出来るのはフィクション、つまり作られた話だけなんです」

チャコ「作られた話だけ・・・」

エリザベート「な、なんですって・・・」

ユダ「じゃあ、俺の話も・・・書き加えることは出来ない・・・」

チャコ「・・・あ、そうか！・・・パパ、聞いて！」

パパ「チャコ・・・パパは、パパは」

チャコ「書きなよ、パパ！書けるよ！」

パパ「駄目だ！もう駄目だ・・・聖書の書き換えが失敗した今となつては、私にはもう書くことは出来ない・・・才能のない私には、新しいアイデアなんか浮かびっこないんだ！」

チャコ「新しい必要なんてないよ！」

パパ「・・・え？」

チャコ「新しいことじゃなくていいじゃない！昔の話を書きなよ」

パパ「昔の話？」

チャコ「そう。本当にあった昔の話。パパの一番大切な、一番書きたいと思える昔の話なら書けるはずだよ。だってほら、神の校正ペンだって、実話は書き換えることが出来ないんだよ。聖書の事は私にはよくわからないけど、でも、それでも本当の話には力があるんだって、今わかった。それなら絶対書けるはずだよ！ねえ、パパ、もう一度頑張ってみなよ」

パパ「本当に書きたいと思える昔の話・・・そうか、私小説！私小説か！」

チャコ「パパ！」

パパ「だけどチャコ、私はお前を裏切りそうに・・・」

チャコ「いまさら！いまさらだよ、パパ。駄目パパには慣れてるもん。だからさ、ね」

パパ「・・・ありがとう・・・パパ書くよ。もう一度、やり直してみる！そうだ、タイトルを思いついたぞ！」

チャコ「すごいじゃない！なんていう本なの！？」

パパ「チャコとの日々」

チャコ「チャコとの日々？・・・」

パパ「ああ。パパの人生で一番大切な思い出を書く。それは、チャコと過ごした日々だ。君が生まれた時、初めて一人で立った時、幼稚園、小学校、全部全部大切な・・・最高の実話だ！」

バンジー「封じ込めてた本のページを破っていくパパ。」

バンジー「あれ？動けるぜ」

にんじん「僕、なんで泣いてるんだ？」

パンドラ「二度と金人はやりたくない。タロットいつまで寝てるんだ」

タロット「ばれた？ふあー、昼寝は最高だね」

バンジー「エリザベート、もういいだろう？」

もくじ「あなたの夢こそフィクションですよ」

パンドラ「本の世界は本の世界で素晴らしいと思わないか？」

エリザベート「全然。不幸はもうたくさん。私は所詮、悲劇の王妃よ」

マリーアントワネット「気持ちは分かるわね」

エリザベート「ふん・・・帰るわ。私の暗い暗いお話の世界へ。仕方ないわね。どんなにうんざりしても、これが私の人生の実話ってわけか。じゃ、ごきげんよう」

去っていくエリザベート。

●第六章

チャコの部屋。夢中で執筆するパパ。本の片付けをするチャコ。

パパ「そうだった、そうだった！」

チャコ「気持ち悪！一人で何ニヤニヤ思い出してるのよ!？」

パパ「いや、ほらあの時、パパも小さなチャコに本気で切れちゃってさ」

チャコ「覚えてるわよ。始めて自転車練習した時の事でしょ？」

パパ「全然乗れないからチャコが怒っちゃってなあ」

チャコ「当たり前じゃない？パパったら“乗れないのは仕方がないけど、簡単にあきらめるな!”なんて、五歳の子供にムキになっちゃって」

パパ「まったくだよな、自分のほうこそ簡単にあきらめちゃってさ・・・駄目なパパだ」

チャコ「でもいいじゃん。こうしてまた書き始めたんだし。これからもっと」

ママ「パパ、大変よ!大変!どこ!どこにいるの!？」

パパ「ここだよ、ママ!どうしたんだろうな、ママのやつ」

部屋に駆け込んでくるママ。

ママ「ここにいたのね!パパ、大変!パパの小説が取ったのよ!」

チャコ「何を?何を取ったの?」

ママ「特別賞よ!ポエム社の小説コンテストで、審査員特別賞を取ったのよ!」

チャコ「本当!?ママ!」

ママ「ほら、この手紙みて!手紙!」

パパ「・・・この度はポプラ社小説コンテストにご応募いただきまして、誠にありがとうございました。選考の結果、貴殿の応募作品【チャコとの日々】が審査員特別賞を受賞したことをお知らせ致します。優れた私小説であり、心温まるエピソードの数々は、優れた育児書としても読者の心をつかむ事でしょう。つきましては、7月20日に行われる授賞式にご出席願いたく・・・やった・・・やった!チャコ、ママ!」

ママ「やっぱり私が見込んだ人だわ!あなたはいつか必ずやると思っていたのよ!」

パパ「・・・そうだったの？まあ、いいか。ママ、ありがとう！」

チャコ「パパ、おめでどう！これからもがんばって書いてね。私小説」

パパ「ああ。自分の得意分野が分かったんだ。もう怖くない。大切な記憶達をしつかり、一文字一文字刻んでいくよ」

ママ「でも焦らずゆっくりでいいのよ。あなたのペースで、あなたの書きたいものを書き続けて。そして、家族で仲良く暮らしましょう」

パパ「すまない、ママ。私の稼ぎがないものだから」

ママ「なによ、今さら。私は仕事大好き女だから。仕事が出来て幸せよ。ね？チャコ」

チャコ「うん。さ、片付けの続き、続き」

ママ「珍しいわね？っていうか、初めてじゃない？本片付けるの」

チャコ「そうだっけ？」

ママ「それにあなた、普通に話してるわよ。おかしな丁寧語じゃなく」

チャコ「あ、ほんとだ。気が付かなかった。でも多分」

パパ「多分、なんだい？」

チャコ「ううん、いい」

ママ「変な子ね、言いかけたことは言いなさいよ！」

チャコ「あのね・・・」

パパ&ママ「うんうん？」

チャコ「二人とも、大好き！」

駆け寄った拍子に本棚が揺れ、本が落ちる。

みんなが現れる。

やっと帰ってこれたクリスは泣いて喜ぶ。

再会を喜ぶみんな。

蜘蛛「一件落着てやつですかね？ま、家主にとっては良かったからいいか。私はこれからどうするって？こう片付けられたんじや、住みにくくなりそうなんで引越します。どこかにいないかな・・・本に囲まれた埃だらけの引きこもりは。あ、なんだ、そこにいるじゃないですか！お邪魔しますよー！」

おしまい